

「とよみつひめ」施設栽培における 成熟異常果の発生防止

豊前分場

1 背景、目的

イチジク「とよみつひめ」の施設栽培では、梅雨明け後の夏季高温時における低糖度の成熟異常果の発生が問題となっています。そこで、成熟異常果の特徴の解明し、発生防止技術を確立しました。

2 成果の内容、特徴

- 1) 「とよみつひめ」の成熟異常果の外観的特徴は、小玉で果頂部がリング状に着色し、肥大せずに熟すタイプ（小果肥大不良）と、果頂部のみが熟すタイプ（果頂部先熟）があります（図1）。
- 2) 高温条件下では、収穫開始7日前から収穫終了まで土壌乾燥を防止し、結果枝の基部径を20 mm未満に樹勢管理することで果実糖度の低い成熟異常果の発生を抑制できます（図2、一部データ略）。
- 3) 基部径が20 mmを超える結果枝は、枝の基部を環状はく皮することにより、果実糖度を無処理の場合より高く維持でき、成熟異常果の発生も抑制できます（図3）。

3 主要なデータ・画像など

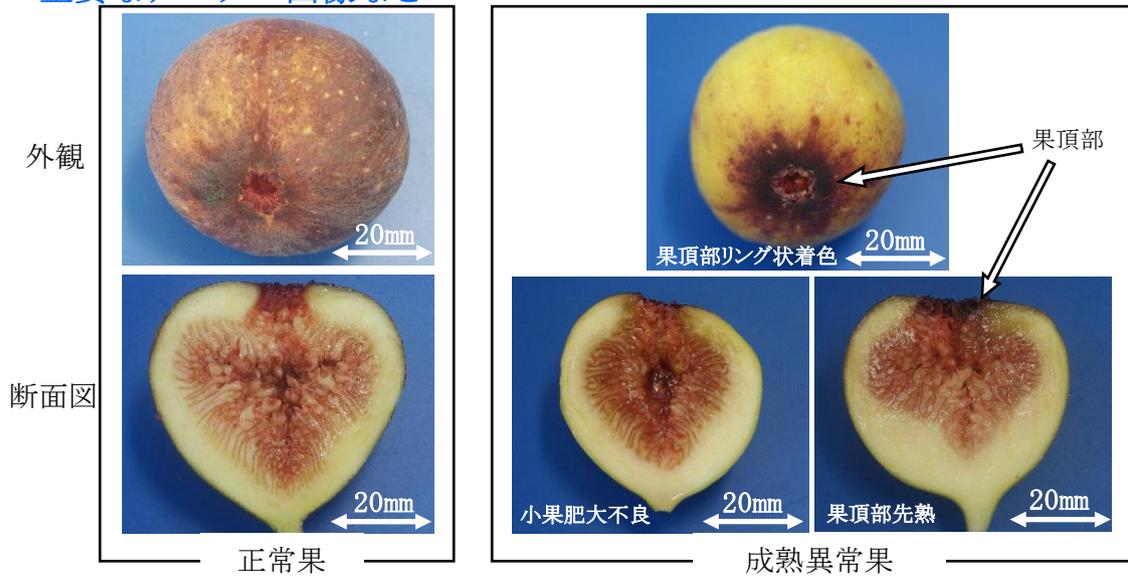


図1 「とよみつひめ」の正常果と成熟異常果の外観および縦断面

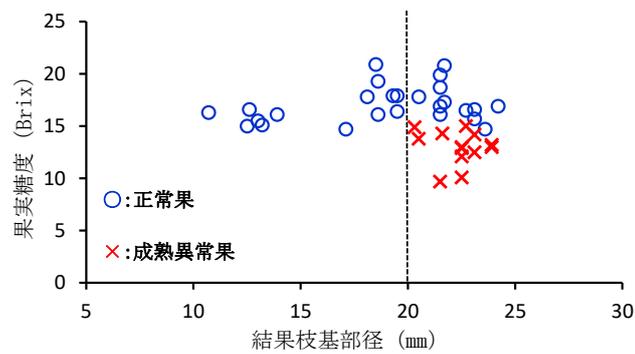


図2 高温管理ハウスにおける結果枝の基部径別果実糖度および成熟異常果発生の有無（平成27年）

- 注) 1. ハウス内最高気温 40.0℃（9月23日）、収穫日：9月27～30日
2. 収穫期間中は土壌乾燥防止（土壌中の水分含量を示す pF 値が 2.2 でかん水開始。）

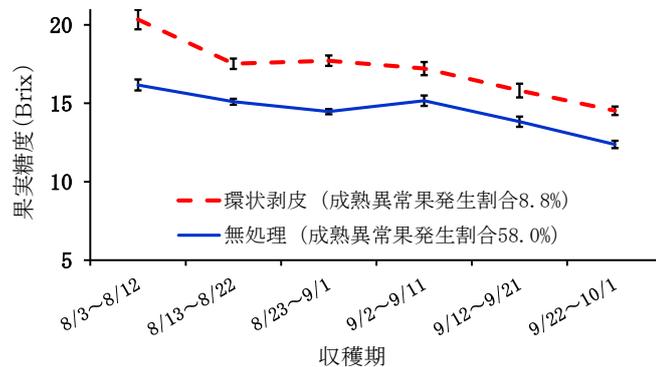


図3 基部径 20mm 以上の結果枝の環状はく皮による果実糖度(Brix)の経時的变化（平成29年）

- 注) 1. 図中のバーは標準誤差を示す。
2. 環状はく皮処理日：7月16日。
3. 収穫期間中は土壌乾燥防止（土壌中の水分含量を示す pF 値が 2.2 でかん水開始。）